

平成28年度 第58回 全国公立学校教頭会研究大会徳島大会 報告

青森市立油川中学校
教頭 佐藤 明彦

大会主題：『豊かな人間性と創造性を育む学校教育』

キーワード：生き抜く力・絆づくり

サブテーマ：郷土へ誇りをもち 人との関わりを深め たくましく生き抜く子どもの育成

開催期日：平成28年7月27日（水）、28日（木）、29日（金）

会場：徳島県徳島市 アスティとくしま、徳島グランヴィリオホテル、阿波観光ホテル、ザ・グランドパレス、パークウエストーンホテル、ホテルクレメント徳島、徳島県教育会館

日程：7月27日（水）開会行事、シンポジウム

7月28日（木）分科会「第1B分科会」

7月29日（金）研究のまとめ、記念講演、閉会行事

平成28年度の全国教頭会に参加させていただき、大変勉強になりました。2日目の分科会では「第1B分科会」に参加しました。本県からの参加者は、弘前四中の館山光伸教頭先生と私の2名のみの参加でしたので、この分科会の報告をしたいと思います。

第1B分科会 課題：「教育課程に関する課題」

提言Ⅰ：生きる力を育む教育課程の編成・実施・評価 （9：30～12：30）

サブテーマ ～創意工夫を生かした特色ある学校づくりを目指して～

- ・提言者：富山県富山市立長岡小学校 教頭 米田真二
- ・助言者：倉吉市立鴨川中学校校長：黒川泰、徳島県教育委員会学校教育課指導主事：武井和夫

（1）研究の概要は別紙のとおり

（2）教頭の役割及び関わり方（グループ協議から）

グループ協議の柱：「特色ある教育課程編成のための教頭の役割」

- ・ 全国のどの小中学校でも、教頭は教育課程外の仕事（外部との折衝、苦情等への対応、施設営繕、PTA等）が多く、また学校事情により授業をもったり、事務を担当したり、小学校では学級担任をもったりしている場合もある。よって、提言にあるような仕事を教頭が行うことは不可能である。教頭は、組織を活用しながら、任せる部分は任せながら助言をしていくことが大事である。
- ・ 学校としてアクションプランを企画・実践する際、学力向上であれば「平均点を〇〇点以上を目指す」などと明確な数値目標を設定することがある。しかし、教頭は、先生方が単に数値にばかりこだわり、数値よりも大事な意欲や態度、考え方の部分、質的な部分等をおろそかにしないように、アドバイスをしていかなければならない。
- ・ 学校それぞれで実態が違うので、学校課題も違うし、具体的なその年度の学校の教育方針も異なる。よって、教頭は、学校の実態と校長の経営方針を踏まえ、どのような役割を果たせばよいのかを考える必要がある。その学校の実態によっては、授業を可能な限り教頭が受けもつこともありである。それぞれの学校には、その学校に合った教頭の役割がある。
- ・ 「道德教育の充実」「漢字力の向上」など、学校として取り組もうとしても、それが学級や学年の段階で止まっている場合がある。それを、子どもたちや先生方により強く意識させ、学校の取組を家庭にも知らせ、家庭での協力もいただき、学校全体の取組として機能するよう、教頭が気配りをしていかなければならない。
- ・ 教頭は校内研修で指導案の点検をするが、その際、先生方の書いた指導案を見ると、先生方が校内研のポイントをよく理解していない（混乱している、誤解している、など）ことに気が付くことがある。そのようなことを感じ取り、先生方の頭の中を整理してあげて、方向性を明確にするのが教頭の役割である。
- ・ 管理職は、先生方の授業をよく見るようにしなければならない。先生方の実際の姿を見てい

なければ、本当に役に立つ助言はできない。

(3) 助言・指導

- ・ 教頭は、まず、今年度の学習指導要領の改訂の方向性（別紙参照）を勉強しておかなければならない。ダーウィンは「強いものや大きいものが生き残るのではない。環境の変化に対応できる者が生き残れるのである。」といている。与えられるカリキュラム、既存のカリキュラムだけではなく、自校の実態に合わせて進化させていかなければならない。
- ・ 教頭が職員の先頭に立つことは大事なことだが、教頭が実行者となってはいけない。実行するのは先生方で、PDCAサイクルをつくり、機能させるのが教頭の本来の仕事である。

提言Ⅱ：教育課程の編成・実施における教頭の関わり

(13:30～16:30)

サブテーマ ～学校の統合による新中学校開校に向けた学校・家庭・地域の連携の実践を通して～

- ・ 提言者：徳島県小松島市立小松島南中学校 教頭 荒井俊輔
- ・ 助言者：倉吉市立鴨川中学校校長：黒川泰、徳島県教育委員会学校教育課指導主事：武井和夫

(1) 研究の概要は別紙のとおり

(2) 教頭の役割及び関わり方（グループ協議から）

グループ協議の柱：「学校・家庭・地域の連携を図るための教頭の役割」

- ・ 地域と連携する上で、地域の伝統文化の継承活動等を総合的な学習の時間で取り上げ、実際の祭りにも参加する学校がある。その際、よく問題になるのが、休日や時間外に教師がボランティアで引率することである。教師にとっては負担であるので、学校での練習は教師がやるが、休日の祭りの引率は地域の団体に任せるなど、教頭が、調整しなければならない。そうしなければ、教師の負担感がなくなる。
- ・ 地域や保護者の不平・不満・不安等の解消に、どう前向きに向かっていくかが教頭として大切なことである。その際、全てのことを学校が引き受けることはできないので、学校として「できること」と「できないこと」を明確にし、それを理解してもらえるように丁寧に説明することが必要である。
- ・ 地域の期待に応える学校にするためには、管理職だけ頑張るのではなく、教職員をうまく指導し鍛えていく必要がある。地域の行事に参加することに、教職員は負担感をもっており、反対する場面が多いようであるが、地域の伝統、学校の歴史等を考えると、切ることができないことが多い。嫌でもやらなければならないことが多い。それを、教職員に納得させ、前向きに取り組んでもらえるようにするのが教頭である。
- ・ 校種間の連携、地域との連携など、プランどおりに進んでいるうちは良いが、プランと異なる部分が出てきたとき、教頭の出番となる。問題・課題を明確にし、フットワークを軽く連携先と情報交換し、同時に自校の状況を踏まえて調整していかなければならない。

(3) 助言・指導

- ・ 「次世代の学校・地域」創生プラン（別紙参照・文部科学省から H28.1）を勉強すること。
このプランは3つの柱からなっている。
 - ①地域と学校の連携・協働に向けた改革（コミュニティ・スクール、地域学校協働活動の推進）
 - ②学校の組織運営改革（「チーム学校」に必要な指導体制の整備）
 - ③教員制度の一体的改革（子どもと向き合う教員の資質能力の向上）このことを踏まえ、私たち教職員は、「社会に開かれた教育課程」を編成しなければならない。そのためには、社会のものを教育課程に組み入れる「カリキュラムマネジメント力」とチーム学校で教育活動を推進していくために、専門性のある人を学校に取り入れる「組織マネジメント力」を身に付けていかなければならない。
- ・ 学校や先生方が困難に出会ったとき、それをチャンスに変えていけるように、前向きに行動し、道筋を示してやるのが教頭の仕事である。常に前向きに、夢を語りながら邁進していく教頭であってほしい。
- ・ 日本という国には「人」しかない。人材こそ日本の宝であり、困った時こそ教育の力が必要なのである。日本の先生方はすばらしい。自信を持って指導してください。